

## 看護学生の同一性形成の視点で展開する発達援助の積み上げ型講義の評価 ～同一性形成のための共同的看護実践による継続した自我事象の変革～

徳永 龍子, 前田 則子, 園田 和子

**目的：**A大学の発達援助論では、人間の成長発達の既習内容を保育園、病院、老人保健施設等の発達援助実践で対象者に照応しながら統合し、実践後その内容を活かした発展学習により到達目標を目指している。講義、演習、実践、講義を連動させた積み上げ型講義である。経験する視点は、人間の成長発達を学ぶこと、社会性の獲得のための主体的な行動、思考様式獲得、対人関係技能の4つとする。

本研究の目的は、平成19～23年度の積み上げ型の講義が到達目標に達したかを評価し、平成24年度からの大学のカリキュラム改正に伴う講義担当者変更にあたり、教育のあり方への示唆を得ることである。

**方法：**調査は、自記式アンケートとし、A大学の平成19～23年度の看護学生の1年次生254人のうち、同意の得られた222人（回収率87.4%）を調査分析した。

**結果：**人間と看護との関係の表現化として、学生は、人間の成長発達の既習内容から対象者および家族の主体的な行動、発達段階を判断する手段として対人関係技能による支援を看護の役割と表現した。講義形態、予習、振り返りの状況としては、知識の獲得のための振り返りは205人（92.3%）が肯定的に答えた。

積み上げ型講義の展開についての自由記述の分析としては、＜人間の成長発達の理解と講義の楽しさ＞＜人間の発達と看護との関係を知る自分自身への成長＞＜実践で対象者の特徴、個人差の理解と納得＞＜実践での困惑＞＜学生の自己学習、理解不足の明確化＞＜複数教師の印象的で新鮮で判りやすい講義＞＜複数教師の講義は不統一で戸惑う＞＜講義時間・説明・演習不足＞＜資料への希望＞＜講義への困惑＞の10カテゴリーに分類できた。

同一性形成のための社会性獲得についての自由記述の分析としては、＜主体的な予習、復習、実践行動＞＜利点を見る人間理解の思考様式獲得＞＜挨拶、話し方の対人関係技能の充実＞の3カテゴリーに分類できた。

**考察：**看護学生が1年生の最初に講義、演習、実践、発展講義の積み上げ型講義を経験することは、同一性形成の「必要性に気づかない」段階から「発達援助の講義目的は人間と看護を統合することと気づく」ことである。この気づきの事実の連続的交替は、学生自身をも人間発達をしていく状態と同一化することである。従って、看護学生が講義、演習で自信を獲得し実践で成功体験ができることは、職業人として必要な自我事象の継続した変革の糸口になると評価できる。

**キーワード：**積み上げ型講義、看護学生、人間発達、主体的な行動、思考様式獲得、対人関係技能、自我同一性の獲得

### I. 緒 言

A大学の発達援助論では、人間の成長発達の既習内容を保育園、病院、老人保健施設等の発達援助実践で対象者に照応しながら統合し、実践後その内容を活かした発展学習により到達目標を目指している。講義、演習、実践、講義を連動させた積み上げ型講義である。

履修する看護学生は青年期にあり、同一性形成<sup>1)</sup>

の発達課題を持つ。この視点から、学習内容は人間の成長発達を学ぶことと、意識して経験を積み同一性形成をすることとする。経験する視点は、社会性の獲得のための主体的な行動、思考様式獲得、対人関係技能の3つとする。その根拠は、以下の研究である。杉森、グレッグ、舟島<sup>2)</sup>による病院に看護師として就労する青年のデータ分析した研究は、エリクソンの理論を前提に同一性獲得に関わる学生時代の4項目の経験の構造を明確にしている。著者は、看護学生が最初に必要とする経験を「社会性の獲得」

と判断する。多様な経験による視野の拡大は、大学生活全般と考える。本講義で経験することは、社会性の獲得に必要な主体的な行動、思考様式獲得、対人関係技能の充実を視点とする。

青年期にある看護学生の講義を、同一性形成の視点で組み立て評価する先行研究はみられない。本研究の目的は、平成19～23年度の積み上げ型の講義が到達目標に達したかを評価することである。そして、平成24年度からのA大学のカリキュラム改正に伴い講義担当者変更にあたり、教育のあり方への示唆を得ることである。

## Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象者：A大学 看護学生 平成19～23年度1年次生 222人(254人の87.4%)
2. 調査内容：自記式アンケート、各期のレポートの分析
3. 調査時期：平成19～23年7月
4. 分析方法：数値分析およびカテゴリー分析
5. 倫理的配慮
  - 1) 調査研究の目的は、積み上げ型講義の効果を明確にすることである。
  - 2) 学生には研究目的を文書、口頭で説明し、研究使用の同意を得た。(平成19年度は口頭説明)
  - 3) データは無記名で個人が特定できないように数値、カテゴリー分析する説明をした。
  - 4) 研究参加は自由意志であり、研究不参加でも成績に関係しないことを説明した。

## Ⅲ. 積み上げ式講義の方法と内容

### 1. 講義の方法

平成19～23年度は、複数の教員によるオムニバス方式の講義形態をとる。教員数は、5～3名と減少していった。講義目的は、成長発達を学ぶと共に、講義の最初と最後に同一性形成のための社会性の獲得(主体的な行動、思考様式獲得、対人関係技能の充実)をすることを意識づけするために「学んでほしいこと」「学んでほしかったこと」を入れている。講義展開も初年度は資料での講義であったが、2年目から教科書を使用する。学生に未経験の年代のイメージ化を図るため、教科書、ビデオ、スライド、学

習課題、事例でのロールプレイ演習、実践後グループワークでその内容を活かした発展学習を実施している。

### 2. 講義内容

#### 1) 発達援助論の到達目標

- ① 社会的存在としての人間のライフサイクルと理論の関係が理解できる。
- ② 人間の成長発達の原則、身体諸機能の変化が理解できる。
- ③ 人間の成長発達段階に応じた身体的・心理的・社会的特徴が理解できる。
- ④ 個人の発達段階に応じたセルフケア機能の向上、家族・集団・看護職の援助と役割が理解できる。

#### 2) 同一性形成のための社会性獲得の目的と4つの視点

看護学生は主体的な行動により、人間の成長発達の講義および演習の既習内容を基に実践し、実践事例を活用した発展学習により、思考様式獲得、対人関係技能の充実を目指す。

- ① 人間のライフサイクルと発達の特徴を理解できる自分自身への成長
- ② 尊厳ある生命を生きる人間を大切にすることを養う。
- ③ 健康を生き健康づくりをする人間と看護との関係が理解できる。

学生には、社会性の獲得のための思考様式獲得、対人関係技能の充実などのための4視点を提示して、主体的な行動で講義、演習、実践をするよう説明する。積み上げ型の講義展開の最後に学生は、人間としての自分史を作成する事で自分をモデルに多様な人間を科学する事を理解する。

視点1. 講義前の各期のイメージを学生が配布資料に記入する。

視点2. 講義後に各期のイメージ変化をグループ集約し、イメージを板書して共有する。

視点3. 講義、演習で各期の観察点、発達を妨げない接し方の留意点を全員で見出す。

視点4. 実践で出会った乳幼児、壮年、老年の各1事例を発達・課題・看護の視点から記述し発表できる。成長発達と看護の関係を学生全員で共有化し、看護観を表現する。

3) 表1 平成23年度の授業展開

内 容	教 材 ・ 演 習 等
1 ①ヒト，人から人間へ ②個人・家族・集団	資料，教科書，スライド
2 発達理論の定義と分類，主な発達理論の内容と活用	教科書，スライド，資料
3 ①成長発達の原則，家族の役割 ②発達課題	教科書，ビデオ，資料
4 乳幼児期の身体的，心理・社会的特徴	教科書，資料，ビデオ
5 本人・家族の主体性と潜在能力を引き出す	教科書，ビデオ
6 乳幼児期における健康づくりとしつけ，対人支援	資料， <u>ロールプレイ演習</u>
7 学童期の身体的，心理・社会的特徴，発達課題	教科書，スライド
8 思春期の身体的，心理・社会的特徴，発達課題	教科書，スライド
9 青年期の身体的，心理・社会的特徴，発達課題	教科書，スライド
10 壮年期の身体的，心理・社会的特徴，発達課題	スライド，グループ学習
11 老年期の身体的，心理・社会的特徴，発達課題 対人関係の手法	教科書，資料，グループ学習 <u>ロールプレイ演習</u>
発達援助実践 保育園，病院，老人保健施設等	<u>実習</u>
12 レポートの書き方，自分史作成目的と作成の留意点	資料，スライド
13 乳幼児期の成長発達と看護職の支援の発表，共有化	資料，グループ学習
14 壮年期の成長発達と看護職の支援の発表，共有化	資料，グループ学習
15 老年期の成長発達と看護職の支援の発表，共有化 全員で人間と看護との関係の表現，自分史の作成	資料，グループ学習

#### Ⅳ. 結 果

##### 1. 人間と看護との関係の表現化

平成23年度の看護学生は，入学4カ月後の最後の講義で「看護とは，対象者および家族が健康の維持，病気の回復により自立した生活をするために行うコミュニケーションと支援である」と表現した。学生は，人間の成長発達の既習内容から対象者および家族の主体的な行動，発達段階を判断する手段として対人関係技能による支援を看護の役割と表現した。

##### 2. 講義形態，予習，振返りの状況

オムニバス形態の講義「教師が変わっての講義でよい」に対して202人(91.0%)の学生が肯定的に答えた。課題による予習実施は，199人(89.6%)の学生が実施していた。実施割合は年により差が大きい。知識の獲得のための振返りは，205人(92.3%)が肯定的に答えた。

表2 講義形態、予習、振返りの年次別状況

上段：人数 下段：%

	実 施 年	19 年	20 年	21 年	22 年	23 年	合計
		55 人	47 人	50 人	51 人	51 人	254 人
	学 生 数	50 人	42 人	43 人	45 人	42 人	222 人
	回 答 数	90.9	89.4	86.0	88.2	82.4	87.4%
	回 答 率						
講 義 形 態	教師が変わっての講義でよい	46 人	41 人	37 人	39 人	39 人	202 人
		92.0	97.6	86.0	86.7	92.0	91.0%
	教師が1人で担当したほうがよい	3 人	1 人	6 人	6 人	3 人	19 人
		6.0	2.4	14.0	13.3	8.0	8.6%
	どちらでも	1 人	0 人	0 人	0 人	0 人	1 人
		2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4%
予 習 実 施	7割以上予習した	1 人	5 人	5 人	5 人	17 人	33 人
		2.0	11.9	11.6	11.1	40.5	14.9%
	半分くらい予習した	4 人	21 人	14 人	16 人	18 人	73 人
		8.0	50.0	32.6	35.6	42.8	32.9%
	3割くらい予習した	38 人	15 人	17 人	16 人	7 人	93 人
		76.0	35.7	39.5	35.6	16.7	41.9%
振 返 り	予習はしなかった	4 人	0 人	7 人	8 人	0 人	19 人
		8.0	0.0	16.3	17.8	0.0	8.6%
	未記入	3 人	1 人	0 人	0 人	0 人	4 人
		6.0	2.4	0.0	0.0	0.0	1.7%
振 返 り	振返りは理解の手助けになった	45 人	38 人	39 人	41 人	42 人	205 人
		90.0	90.5	90.6	91.1	100.0	92.3%
	振返りまとめは必要ない	1 人	3 人	2 人	2 人	0 人	8 人
		2.0	7.1	4.7	4.4	0.0	3.6%
	必要だが他の方法がよい	4 人	1 人	2 人	2 人	0 人	9 人
		8.0	2.4	4.7	4.4	0.0	4.1%

### 3. 積み上げ型講義の展開に関しての自由記述の分析

#### 1) 積み上げ型講義に対する自由記述の分析

発達援助論は、講義、演習、実践、講義を連動させた積み上げ型講義としている。その講義方式に対する学生の自由記述を分析すると表3の通り10カテゴリーに分類できた。

知識の獲得のための＜人間の成長発達の理解と講義の楽しさ＞を肯定的に捉えた項目には14記述を抽出した。「講義の工夫、体験等で展開し学びが深まり楽しかった」、「人間の全時期の発達段階の特徴、課題が理解できた」、「様々な資料、ビデオ、体験談、演習、グループワークなどでイメージしやすく判りやすかった」など体験型学習を肯定的に捉える14項目である。

本講義が意図した＜人間の発達と看護との関係を知る自分自身への成長＞には、肯定的な4記述を抽出した。「将来すべての発達段階の人を診断し看護支援をするので、継続して学び援助したい」、「看護職は人間の発達段階の特徴、発達課題の知識がないと看護提供できない気づき」、「前期の授業で自分自身が様々な人と交流して成長発達した面白さ」、「講義、実習を通して知識と経験を積み目的達成した自分の確認」である。この項目は、平成20、21、22、23年度の学生に記述が見られる。平成19年度の講義内容との差は、レポートを思考展開できるレポート様式に変えたこと、また学生自身が自分の状態に「気づく」、「認める」そして、やれることを精一杯やってもらうために、最後に実施していた「学んでほしいこと」の講義を最初と最後に実施するようにしたことである。

次に既習内容を病院等の実践現場で対象者に照応しながら統合する項目では＜実践で対象者の特徴、個人差の理解と納得＞の12記述を抽出した。「乳幼児、壮年、高齢者の発達の特徴や個人差を実践の場で観察し納得できた」、「全時期を学んだ後に実践に行ったため、特徴や対象理解が深まった」、「着眼点、疑問点が明確になった」、「身の回りの人に関連づけて学べたため、知識と実践内容が合致した」など肯定

的な12項目であった。

反面＜実践での困惑＞には6記述を抽出した。「一気に講義があり情報量が多く、実践で頭の整理が難しかった」、「壮年期を学習したが実践であり深く学べなかった」などの6項目であった。また、＜学生の自己学習、理解不足の明確化＞には、10記述を抽出した。「理論による発達段階の特徴をおさえていず理解不足」、「年代の特徴、接し方やコミュニケーションの取り方の自己学習不足」、「対象者の気持ちがわからない所、接し方など疑問点が明確になった」とする学生がいる反面、「予習や資料、教科書を忘れるとついていけず困る」、「時間がない時の予習はきつい」などの学生もいる。これらのカテゴリーは考察項目となる。

オムニバス形式の講義を肯定的に＜複数教師の印象的で新鮮で判りやすい講義＞とする7記述を抽出した。「専門分野の先生の講義は、区切りが判り印象に残り新鮮」、「先生が変わり多種の話が聞けて新鮮」、「様々な先生の教え方、視点で学べる」など7項目である。一方、否定的に＜複数教師の講義は不統一で戸惑う＞として5記述を抽出した。「前回の授業との繋がり、重複、整合、まとめ方が違い理解に時間を要する」、「講師の講義の進め方、教え方に差があり戸惑う」、「質問、レポートの提出先を統一してほしい」などの5項目である。これらも、考察課題となる。

他に＜講義時間・説明・演習不足＞に6記述、＜資料への希望＞に8記述、＜講義への困惑＞に5記述を抽出した。「振り返り、ノートを書く時間、発表時間がもう少しほしい」、「青年期・壮年期・更年期・老年期の人々の特徴は詳しくほしい」、「授業のスピードが速すぎて、頭に入っていない所があった」、「高齢者で認知機能の低い人の接し方、援助の仕方の演習」、「資料の量が少し多い」、「ノートのとり方、予習の仕方、まとめ方に悩んだ。表現できない」などである。これらは、次年度以降の講義にも関連することから考察課題とする。

表3 積み上げ型の講義方式の自由記述の分析

カテゴリー	記 述 内 容
人間の成長発達の理解と講義の楽しさ	講義の工夫、体験等で展開し学びが深まり楽しかった 116 人
	人間の全時期の発達段階の特徴、課題が理解できた 36 人
	様々な資料、ビデオ、体験談、演習、グループワークなどでイメージしやすく判りやすかった 27 人
	グループワークで自分と他の人の意見も参考にして視野が広がる 26 人

	成長期別のまとめ資料があったので再確認でき役立った 12 人
	とても楽しかった 14 人
	全時期に思い込みの所があり，改めて講義で発達課題等を学べた 11 人
	成長期の順に授業が進んだので判りやすく面白かった 8 人
	自分の発達段階を自覚し家族等への感謝の気持ちが一層強まる講義 8 人
	発達理論等覚えていない所は発達カードで内容理解していきたい 5 人
	体を使って学び，ヒントで考えをまとめるので外面，内面世界両方からの考えが深まる 5 人
	資料を作ってまとめることで理解が深まった 3 人
	自分で調べた知識が使える 2 人
	自然科学，人間科学が人間の発達に関係があることに興味を持った 1 人
人間の発達と看護との関係を知る自分自身への成長	将来すべての発達段階の人を診断し看護支援をするので，継続して学び援助したい 20 人
	看護職は人間の発達段階の特徴，発達課題の知識がないと看護提供できない気づき 12 人
	前期の授業で自分自身が様々な人と交流して成長発達した面白さ 5 人
	講義，実習を通して知識と経験を積み目的達成した自分の確認 3 人
実践で対象者の特徴，個人差の理解と納得	乳幼児，壮年，高齢者の発達の特徴や個人差を実践の場で体感し納得できた 45 人
	体感し納得できうれしかった 1 人
	全時期を学んだ後に実践に行った為，特徴や対象理解が深まった 42 人
	着眼点，疑問点が明確になった 13 人
	身の回りの人に関連づけて学べたため，知識と実践内容が合致した 11 人
	実践で新しい発見や気づき，確認し知識を得た 8 人
	色々な理論で発達課題や発達段階を学習したので，会った人の課題や段階がよくわかった 5 人
	理論の発達課題と照応してみると個別性に気づき興味深かった 5 人
	発達段階を理解してから実践したので，習った所が思い浮かんだ 5 人
	しっかり見て聴き判断しないと発達段階や特徴に気づかず奥が深い 4 人
	資料が豊富で役に立つ情報が沢山あってよかった 3 人
	各段階の心理状況を学べたので思いや人生を聴けた 2 人

	老年の方は元気な方から寝たきりの方までいてイメージが変わった 1 人
実践での困惑	一気に講義があり情報量が多く、実践で頭の整理が難しかった 6 人
	発達や衰えに個人差があることが理解できていなかった 4 人
	壮年期を学習したが実践であり深く学べなかった 4 人
	実習前、接し方や実習の想像ができなかった 3 人
	講義内容、基準と違う所があると困惑し理解に時間を要する 2 人
	4・5 歳児の区別が付かない所があった 1 人
学生の自己学習、理解不足の明確化	理論による発達段階の特徴をおさえきれていず理解不足 26 人
	年代の特徴、接し方やコミュニケーションの取り方の自己学習不足 20 人
	予習や資料、教科書を忘れるとついていけず困る 20 人
	時間がない時の予習はきつい 12 人
	対象者の気持ちがわからない所、接し方など疑問点が明確になった 7 人
	1 週間あると思い、後回しにし、怠ける 3 人
	課題をやってくる人とこない人があり、グループワークが大変辛い 3 人
	資料をみて教科書を見なくなり、自分でまとめなくなる 3 人
	社会制度と発達の関係の学びの不足 1 人
複数教師の印象的で新鮮で判りやすい講義	精神面の発達についてもっと勉強しておけばよかった 1 人
	専門分野の先生の講義は、区切りが判り印象に残り新鮮 49 人
	先生が変わり多種多様な話が聞けて知識や自己の視点が增える 30 人
	様々な先生の教え方、視点で学べる 17 人
	違う雰囲気で変化があり多くの学びがあり面白く楽しい 9 人
	わからない所は近くにいる別の先生に確認できる 5 人
	教科書のページや場所を言ってくれ解りやすい 2 人
複数教師の講義は不統一で戸惑う	専門分野の教師のまとめは判りやすい 2 人
	前回の授業との繋がり、重複、整合、まとめ方が違い理解に時間を要する 29 人
	講師の講義の進め方、教え方に差があり戸惑う 51 人
	質問、レポートの提出先を統一してほしい 13 人
	教師により聞こえづらい点やわかりにくい点あり 5 人
	教師がたくさんいると緊張する 1 人
	振り返り、ノートを書く時間、発表時間がもう少しほしい 35 人

講義時間・説明・演習不足	青年期・壮年期・更年期・老年期の人々の特徴は詳しくほしい 21 人
	授業のスピードが速すぎて、頭に入っていない所があった 16 人
	高齢者で認知機能の低い人の接し方、援助の仕方の演習 11 人
	課題の説明不足 9 人
	それぞれの時期の特徴を知った上での支援演習の時間がまだほしい 2 人
資料への希望	資料の量が少し多い 24 人
	資料と授業の進め方を合致させてほしい 8 人
	資料に書き込む部分を多くしてほしい 4 人
	資料の管理が難しい紛失の恐れあり 4 人
	字が小さく見えにくい所は大きくしてほしい 4 人
	パワーポイントの資料も全てほしい 2 人
	資料をカラーコピーや濃くしてほしいものもあった 1 人
	資料には要点しか書いてないので、中身までかいてほしい 1 人
講義への困惑	ノートのとり方、予習の仕方、まとめ方に悩んだ。表現できない 3 人
	最初は専門的なことも多く難しく進度が速く理解に苦しんだ 7 人
	きちんと学ぶことができなかった。ただ話を聞きビデオをみているだけ、意味がない 3 人
	自分の理解の仕方と授業の理解の仕方が違うと驚く 3 人
	もっと教科書も使って講義してほしい 2 人

## 2) 同一性形成のための社会性獲得に関する自由記述の分析

ここでは、看護学生の同一性形成のための社会性獲得に関する視点から分析する。社会性獲得の3項目は、主体的な行動、思考様式獲得、対人関係技能の充実である。社会性獲得に対する学生の自由記述を分析すると表4の通り3項目に対応する3カテゴリーに分類できた。

自分自身の成長のために必要なく主体的な予習、復習、実践行動>には、肯定的な13記述を抽出した。看護学生は、「授業への心の準備ができ、やる気、イメージがわく」、「予習で授業が理解でき判りやすい」、「全時期を学んでから実践に行ったので、特徴をとらえ配慮しながら対象者に接した」、「復習が可能である」、「大事な所がわかり理解が深まり分かったこと、疑問が残る箇所の区別がつく」、「講義前後、実践後の学び、イメージの変化、仲間の変化も知ることができ学び

が深まる」など講義前後、実践時、その後の発展学習も主体的に行動できたと自己評価している。

尊厳ある人間を大切にできる態度に照応する<利点を見る人間理解の思考様式獲得>には7記述を抽出した。「乳幼児期、壮年期、老年期は実践前の捉え方を書いて、実践に活かせ、実践後に比較ができた」、「看護をする前に人間としてみる重要性が理解できた」、「良い所を見る視点がより深く学べた」、「自分自身を振り返り周りの人に目を向けることができるようになった」など目的通りの肯定的な7項目である。また、講義、実践現場での記述を合わせて見ると思考過程を経験している。その内容は、人間尊重、ウェルネスの視点で良い所をみる学びなど積み上げ型講義の意図が分析できる。

人間と看護との関係が理解できるためには、対象者との関係性を持つ経験が必要である。<挨拶、話し方の対人関係技能の充実>のためには、5記述を



抽出した。「挨拶、話し方の演習をしていたので話や関係が持てた」、「年代に合わせての接し方ができた」、「乳幼児の発達段階に応じた接し方がうまくできた」、「高齢者の特徴と実践時の留意事項が結びついた」と肯定的な項目と、「コミュニケーションの取り方が上手くできず気持ちを聞けなかった」と不十分な項目が混在する。実践準備として2回のロールプレイ演習を行った。

看護学生が、初めての実践環境に受容され、個人、集団との相互行為をとることが出来るために必要な

行動予測の示唆を得ておく演習は、実践の導入の段階に必要な条件である。1年生の最初に講義、演習、実践、発展講義の積み上げ型講義を経験することは、看護学生が同一性形成の「必要性に気づかない」段階から「行為の目的はこんなことと気づく」段階への連続的交替である。従って、看護学生が自信を獲得し実践の成功体験ができることは、職業への社会性の獲得の第1歩である。考察では、積み上げ型講義を同一性形成の視点で展開する。

表4 同一性形成のための社会性獲得に関しての自由記述の分析

カテゴリー	記 述 内 容
主体的な予習、復習、実践行動	授業への心の準備ができ、やる気、イメージがわく 27 人
	予習で授業が理解でき判りやすい 34 人
	全時期を学んでから実践に行ったので、特徴、課題をとらえ配慮しながら対象者に冷静に関わることができ役立った 43 人
	振返りで復習が可能である 75 人
	振返りで理解の程度がわかる 63 人
	振返りで体系化し頭の整理がつく 34 人
	大事な所がわかり理解が深まり分かったこと、疑問が残る箇所の区別がつく 33 人
	要点を記録として残せるので後々思い出し再認識できる 21 人
	配布資料により学習しやすい 12 人
	講義前後、実践後の学び、イメージの変化、仲間の変化、一緒にまとめることで発達の特徴、課題の学びが深まる 9 人
	思いを考え直すことができる 3 人
	成長、発達など1つ1つ意味づけし、理解し考察する講義でよい 2 人
	もっとビデオを見て各年代に関わる看護職の学習を積みたい 1 人
利点を見る人間理解の思考様式獲得	乳幼児期、壮年期、老年期は実践前の捉え方を書いた事を実践に活かせ、実践後に比較ができた 8 人
	人間は生まれてから老いるまで多くの発達段階を経ていく不思議 5 人
	自分自身を振り返り周りの人に目を向け、自分の未来への楽しみ 5 人
	良い所を見る視点がより深く学べた 4 人
	看護をする前に人間としてみる重要性が理解できた 4 人
	全人的にみて看護できる考え方を身につけていく 1 人

	成長発達の過程を看護との結びつけ方、仮説をたて証明する過程が興味深い1人
挨拶、話し方の 対人関係技能の 充実	挨拶、話し方の演習をしていたので話や関係が持てた36人
	年代に合わせての接し方ができた12人
	コミュニケーションの取り方が上手くできず気持ちを聞けなかった2人
	乳幼児の発達段階と接し方がうまくできた33人
	高齢者の特徴と接し方など実践時の留意事項が結びついた7人

## V. 考 察

積み上げ型講義が学生の知識獲得と同一性形成の一助となったかを評価し、その要因を明確にし、今後の講義のあり方について考察する。

### 1. 積み上げ型講義の評価

#### 1) 講義プログラム作成の4段階と同一性形成の視点

担当した我々は、学生の発達援助の教育効果を上げるために4つの段階を視点にプログラム作成にあたった。第1に指導者側が正しい知識を習得する。第2にその知識を効果的に伝える技術をもつ。第3に適切な支援の方法をもつ。第4に教育の効果を正確に評価する能力をもつこと<sup>3)</sup>とした。そのための打ち合せ、振返りの会議を持った。

同一性形成の経験の1つである主体的な行動を促すために、学生には予習、振返りを学習課題とした。199人(89.6%)の学生が予習を実施していた。しかし、半分以上実施割合は10.0%～83.3%と年により差が大きい。知識獲得のための振返りは、205人(92.3%)の学生が必要としており年差はない。本講義は、既習のあとに実践を積み上げることとしている。実践準備として、2回の演習を実施した。この事はプログラム作成の第2・3段階にあたる。看護学生が実践環境に適応し発達援助の教育効果を上げるためには、対人関係技能の充実と思考様式の獲得を図る必要がある。両方の基礎的経験があれば学生は、新たな実践環境に受容され、主体的な行動による相互行為が対象者と構築できると予測した。

学生が同一性形成の経験の2つ目の思考様式を獲得できるように、乳幼児期、壮年期、老年期の課題レポートを課している。しかし、平成19年度は感想文が目立ったことから、平成20年度から意図的に課題レポートを三文節のレポート様式に変更し作成した。学生は課題レポートの達成過程を経験することで、能動的な課題解決の「創造的能力」の獲得に挑む。実践前の講義では、学生が考えている各期の特徴、講義後に学びからの気づきをまとめた二文節を作成する。学生は、自己学習したレポートを教材として

グループおよび全体学習で、思考した特徴のまとめを強みと弱みに区分して深める。仲間の思考様式も学ぶ。

実践後の最初には、レポートの書き方の講義を行っている。学生に課題レポートがレポート様式になっており、課題達成をすることで「創造的能力」の経験ができることを説明する。学生は、実践で出会った3名の事例のレポート作成、最終課題の自分史作成をすることで思考様式の獲得を目指す。看護学生の声をまとめると、弱みを多くみる視点から強みである潜在能力をみようとする自分自身の成長への気づきがある。

#### 2) 積み上げ型講義による現状と理論を結び付ける思考様式の獲得

実践を通した乳幼児に対する学生の学びは、保育園での対象者からである。壮年期、老年期は、病院、老人保健施設、訪問看護ステーション等での入院患者、入所者、家庭訪問対象者および家族並びに施設職員である。情報収集は、乳幼児、患者、入所者、家族、施設職員との対話による聴き取り、対象者の観察、カルテ情報、指導者からの情報確認である。

内容としては、行動観察、言動観察から形態・機能的側面の発達の現状を認識している。心理・社会的側面は、対話による聴き取りから発達面を主体的に捉えている。

講義前のイメージは、弱みであるネガティブな形態・機能的側面の項目が多い。講義後は、新たな学びである心理・社会的側面、課題がまとめに加わり、実践時の自己の視点を明確にしている。

実践で得た学びと学生自身が認識した学びは、ネガティブな形態・機能的変化ではなく、人間として発達し続ける乳幼児、壮年、老年として良い点、強みを捉えている。遊び、学び、経験を営む人々は、失った物はあっても経験を通して培った知識を活用して潜在能力を活かし、よりよく生活する姿の気づきである。

さらに、捉えた事象を既習理論に当てはめて考察し、

個別性への気づき、あるいは看護職としてのあるべき姿勢に思いをはせ学びとして発表できていた。

### ① 乳幼児期の事例発表のまとめ

乳幼児期の事例発表をまとめると、子どもは喜怒哀楽が激しく、よく食べ遊び寝る。すごく好奇心旺盛で個性的。驚くほどよく聴いて見ており、模倣し想像を形に表現して伝えようとする。何をするでも一生懸命で根気強い子どもたちに、善悪の区別をする学習と良心を発達させる見守りや声かけ、思い切り遊べる自由を与えると集団のルールを作り、けんかをしながら学んでいく。個別の発達を促す生活環境を整え、発達に応じた要求をして、意図的な働きかけや自立支援をすることが看護の役割とレポートしている。エリクソン、ピアジェ、ボウルビイの理論と関連づけ発表する学生が多い。

### ② 壮年期の事例発表のまとめ

壮年期の事例発表をまとめると、壮年期は家庭生活と職業を両立させ一定の経済水準を築いている。育児、教育、家族や親の介護など、家族も増減し社会的責任も多くなる。一方、体力低下、健康保持、対人関係と大変だが、選択した人生はかけがえが無い。この時期に入院すると家庭、会社等に支障が多く、そのため本人および家族の大きな不安となる。健康を保持増進して社会的に責任のある職位にある人がある半面、生活習慣病による喪失感を持つ人と多様で、うつ病や自殺も多い。その人の立場になり社会資源、サポートシステムを活用し、社会復帰し社会生活でできる支援をすることが看護の役割とレポートしている。ハヴィーガストの理論と関連づけ発表する学生が多い。

### ③ 老年期の事例発表のまとめ

老年期の事例発表をまとめると、老年期は心身の衰え病気の人は多いが、職業の有無等で個人差がとても大きい。反面、社会的な経験、技術や知識、礼儀、おしゃれ、経済面は積み重なり、誇りと感謝の心を持っている人が多い。老年期を総合的にみるとエリクソンの英知に納得ができた。そのため老年期の人には、敬意を持って接することが大切である。思いに寄り添い、話を聴いても死への適応も人様々ではっきり解らなかった。老年期の人に合った居場所で、社会資源やサポートを活用し楽しく快適に生活できる生活環境を整える支援をする。生きがいを感じられる創意工夫をして、先を予測し健康状態を維持し生き抜く力を見極め、自分で出来ることを多くする環境整備が看護の役割とレポートとした。

### 3) 人間科学としての演習、実践、自分史作成

ここでは、演習、実践、自分史作成について考察する。看護者は、自然科学と人間科学の専門家であることが求められる。教科書で学ぶ人間発達学は自

然科学であり、その時期であれば、いかなる目的や価値観の人にも当てはまる。しかし、人間は個別性がある。

### ① 演習

学生に人間発達学に加えて、個性も意識させるために実践前に演習を組み込む。学生の同一性形成の実践経験のためには、対人関係技能の充実は必要条件となる。特に看護現場の実践では、既成概念の枠を超えて発達に応じた対人関係技能が必要となるためである。

まず、学生同士で2つの演習をしてもらう。看護技術を既習した学生達は、対象者の発達段階も測定せず衣服の着脱、立つ支援をする。

その後、教員がモデルになり、3人の学生2グループが前に出て支援を同様に試みる。

**難聴者事例：**学生からいきなり触られ、驚くモデル。学生は、3人で話し合い創意工夫をする。「挨拶をしてないし何をするか言っていない」と感じ再考する。しかし、反応がない。耳が聞こえない人ではと学生は気づく。目の高さでジェスチャーや筆談で伝えようとする。筆談で了解したモデルは、難聴ではあるが自立した人で、洋服を渡せば自分で着れた。

**視力喪失者事例：**学生は真正面をみているモデルにジェスチャーや筆談で伝えようとする。

しかし、反応がない。目が見えない人ではと学生は気づく。「こんにちは、寒くないですか。洋服を着られますか。お手伝いをします。黒のカーディガンで良いですか。」と対話して演習する。1回目と違い、演習で学生は、事例の背景、強み、課題を明らかにし、解決の仮説をたてて実践する必要性を思考錯誤していく。

振り返りには、挨拶、自己紹介、対象者の注意深い観察、情報の取得、目の高さで相手にあったコミュニケーションをとる、発達を妨げない支援のあり方などが挙げられていた。看護学生が、初めての実践環境で、個人、集団との相互関係を構築出来るための行動予測の示唆を得ておく演習は、実践の導入段階に必要な条件であると学生が認識したと言える。

### ② 実践、自分史作成による気づき

講義、演習での学びが実践に活かされたことは、アンケートから評価できる。

「全時期を学んだ後に実践に行った為、特徴や対象理解が深まった」つまり、客観的に一線を引きクールな観察者としての視点で見た対象選択の枠内の抽象化した人間発達への気づきをしている。しかし看護学生は、実践や自分史作成を通して、普遍的事実の実証である既習の人間発達学や理論である自然科学の枠に収まりきれない、捨象の部分である個別性

という人間の枠外の部分に気づくのである。学生は、「乳幼児、壮年、高齢者の発達の特徴や個人差を実践の場で体感し納得できた」、「理論の発達課題と照応してみると個別性に気づき興味深かった」、「老年の方は元気な方から寝たきりの方までいてイメージが変わった」、「講義内容、基準と違う所があると困惑し理解に時間を要する」、「発達や衰えに個人差があることが理解できていなかった」などと受容と困惑を混在させて記述している。看護学生は、対象者となる人々を「全人的にみて看護できる考え方を身につけていく」と抽象化した人間発達の枠内と個別性という枠外を加えた全人的人間への気づきである。さらに、学生は、「看護をする前に人間としてみる重要性が理解できた」、「将来すべての発達段階の人を診断し看護支援をするので、継続して学び援助したい」と人間と看護の関係性への気づきである。そして、学生は、「挨拶、話し方の演習をしていたので話や関係が持てた」、「年代に合わせた接し方ができた」など多く記述している。看護学生の実践は、対象者に合わせた人間理解の思考様式を駆使して、自分自身が挨拶、話し方の対人関係技能を使い、双方が主体的に行動し対話が成り立ち関係性を持て始めて成り立つ。これを杉万俊夫は<sup>4)</sup>、『人間科学では、事実、共同実践の中から生まれ、共同実践の中に編み込まれていきます。つまり、人間科学は、共同実践のための科学です』という。看護学生の発達援助の講義は、自然科学としての人間発達学の講義に加えて、演習での事例や実践での対象者との共同実践の中で、人間発達と個別性を生きる全人的人間を実践の場で体感し事実として納得する人間科学との連続的交替といえる。それを統合する講義を共存させて始めて目標達成できるといえる。学生は、学ぶ目的目標に気づかない自分から、抽象化した人間への気づき、個別性への気づき、全人的人間への気づき、人間と看護の関係性への気づき、共同実践への気づき、成長した自分自身への気づきと実践さらに講義の到達目標に達し得た自分に気づいたのである。そのことを学生は、「自然科学、人間科学が人間の発達に関係があることに興味を持った」、「前期の授業で自分自身が様々な人と交流しての成長発達した面白さ」、「講義、実習を通して知識と経験を積み目的達成した自分の確認」と表現している。これらを総合すると、人間の一生という人間の糸は、自然界の人間の糸としては共通である。この時点では、自然科学の世界である。しかし、対象者である人間をよく見ると、他人と共通する色の糸もあるが、個性という異色の糸が混じっている、その2本の糸は、全人的人間としての糸に紡ぎこまれている。このこ

とを学生は、「しっかり見て聴き判断しないと発達段階や特徴に気づかず奥が深い」と表現している。

実践と自分史作成の意義をまとめると、学生は、事例となった対象者とともに共同で発達の現象としての全人的人間として紡がれた人間の事実<sup>5)</sup>に気づく共同実践をするのである。また、自分史作成においては、自分自身が対象者となり過去、現在、未来の共通と個性で紡がれた人間生活の事実を実践観察者としての自分自身が、自分自身の発達を客観的事実として確信を深める共同実践過程を経験するのである。

#### 4) 人間と看護を統合する発達援助の積み上げ型講義の概念化

看護学生が1年生の最初に講義、演習、実践、発展講義の積み上げ型講義を経験することは、同一性形成の「必要性に気づかない」段階から「発達援助の講義目的は人間と看護を統合することと気づく」ことである。この気づきの事実の連続的交替は、学生自身をも人間発達をしていく状態と同一化することである。従って、看護学生が講義、演習で自信を獲得し実践で成功体験ができることは、職業人として必要な連続的な社会性の獲得につながる糸口になると評価できる。これらの講義経験を、これから出会う多くの当事者の「良い所を見る視点」で看護展開できる学生への発達で学生の同一性はさらに発達すると期待する。

看護学生の同一性形成の視点で展開する発達援助論の積み上げ型講義は、看護学生の基礎知識と3つの社会性の学習要因という縦糸を学生の中にたくさん張る作業といえる。演習、実践、自分史作成は、縦糸のいくつかを使いながら紡がれた全人的人間の一生としての横糸を織りこんでいく作業となる。

その横糸の交替は、抽象化した人間への気づき、個別性への気づき、全人的人間への気づき、人間と看護の関係性への気づき、共同実践への気づき、成長した自分自身への気づきと実践さらに講義の到達目標に達し得た自分への気づきである。

以上のことを図にすると、図1のようになる。

図1は、横軸に看護学生の「人間への気づきの変革」の発達を、縦軸に看護学生の「知識と社会性の獲得」をとっている。これらを織り成した完成品が1年次の看護学生の同一性形成となる。まとめると、看護学生が看護の職業決定のためには、「人間への気づきの変革」と「知識と社会性の獲得」が必要と気づき、行動開始した学習習慣を日常化させ看護者として生きる決断をするまでのプロセスである。そのプロセスは、当初は非日常的であった学習行動が一過性でなく、日常生活に定着・継続・定常化することによ

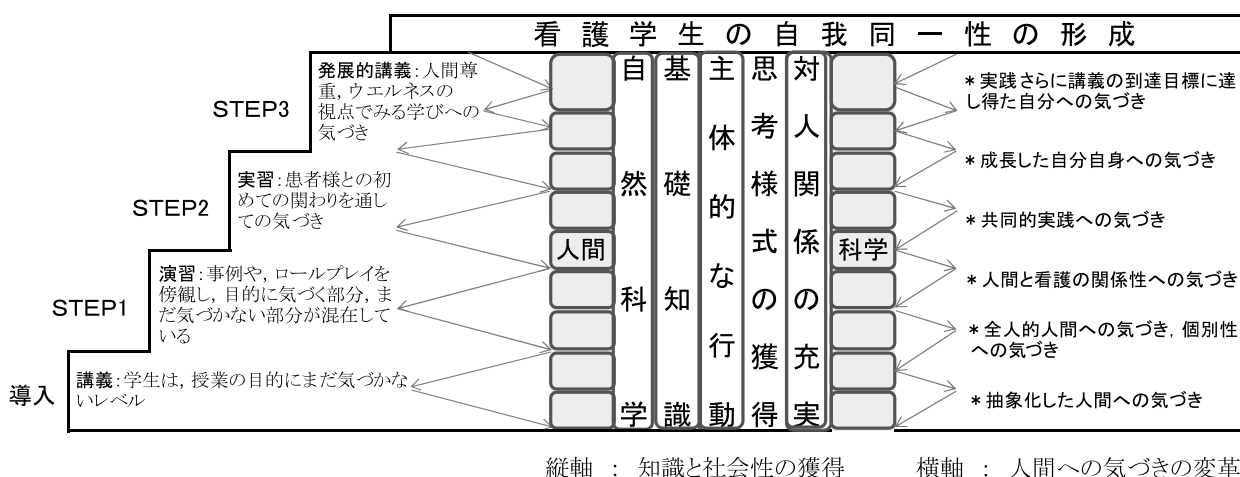


図1. 看護学生の自我同一性の形成過程（継続した自我事象の変革）

って、看護学生の学習行動事象は日常的な生活習慣となる。従って、継続して成功した看護実践は、看護の基礎知識と社会性を駆使しての生活習慣となり、最終的には看護学生が看護職業人として生きることと同一となる。我々は「看護学生の同一性形成」を次のように定義したい。『看護学生が、全人的人間への共同的看護実践を定着・継続・定常化しながら生きて働くための自我事象を継続して変革すること』を、看護学生の同一性形成とする。

## 2. オムニバス形式、積み上げ型講義の限界

ここでは、オムニバス形式の講義および積み上げ型講義全体の評価を行う。オムニバス形式の講義を支持する学生は、202人（91.0%）である。その支持理由は、「専門分野の先生の講義は、区切りが判り印象に残り新鮮」、「先生が変わり多種多様な話が聞けて知識や自己の視点が広がる」、「様々な先生の教え方、視点で学べる」などである。このことは、多くの教師から知識だけでなく社会経験としての社会性としての自己の視点が広がったことを表出している。一方、形式の支持、不支持に関わらず複数教師の不統一性が戸惑う学生が99人（44.6%）いる。今回の講義評価では効果は見られたものの、複数の教員を調整するには連絡等で時間を要し不十分な所は学生の指摘の通りである。この点については、平成19年度5人の担当教師での講義を、平成20・21年度は4人、平成22・23年度は3人とした。平成24年度からは、1人の教員が担当する予定であり改善可能と考える。次に＜実践での困惑＞20人（9.0%）、＜学生の自己学習・理解不足の明確化＞96人（43.2%）、＜講義への困惑＞18人（8.1%）が上げている。予習、復習の不足により、実践が不十分に終わり自己反省する学生が大半であり学生が自覚し実践すれば改善可能と考える。一方、実践後その内容を活かした発展学習

でも「課題をやってこない人があり、グループワークが辛い」、「きちんと学ぶことができなかった。ただ話を聞きビデオをみているだけだった」と両者から意欲が上がらない学生が数名おり講義に支障がある実態が明確になった。学生間での話し合いが必要かと考える。他に＜講義時間・説明・演習不足＞を94人（42.3%）が上げている。「振り返り、ノートを書く時間、発表時間がもう少しほしい」点については、振り返りの次回提出、課題を予習してくると時間短縮可能と説明した所、平成23年度は、予習率も上がり改善した。「青年期・壮年期・更年期・老年期の人々の特徴は詳しくほしい」、「資料の量が少し多い」と矛盾する希望がある。平成20年度から教科書を使い資料を減らしたが少数意見を全て反映する改善は難しい。大学に入学したばかりの学生は、「授業のスピードが速すぎて、頭に入っていない所があった」、「最初は専門的なことも多く理解に苦しんだ」17人（7.8%）ある。「ノートのとり方、予習の仕方、まとめ方に悩んだ。表現できない」10人（4.2%）がある。これらは大学の講義スピードや内容への不慣れによるものとする。その他、演習時間の増加や資料等への細かい要望は次回担当者に引き継ぐこととする。

## 謝 辞

今回、講義実施に対し全面的に御協力いただきました、学生の皆様、これまでに担当いただいた教員、実践現場で学生にいろいろな示唆を与えていただいた対象者の皆様に心から感謝いたします。

## 引用文献

- 1) E. H. エリクソン, 岩瀬庸理訳: アイデンティティ. 金沢文庫, 1982, P9, 15
- 2) 杉森みど里, 舟島なをみ, 他: 看護基礎教育課程

一臨床経験2年目の看護婦の面接調査から，千葉大学看護学部紀要 15：9－15，1993.

- 3) 上島弘嗣，岡山明編著：コレステロールを下げる健康教育，保健同人，2000，P3
- 4) 杉万俊夫：看護のための人間科学を求めて．楽学舎編．2007，P15

#### 参考文献

- 1) 光橋悦子，季 延秀，川久保清：短期減量指導プログラム実施後の体重変化と生活習慣要因の関連，日本公衆衛生誌 50：136-145，2003
- 2) 松本千秋著：医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎，医歯薬出版株式会社，2002，37-46

## Evaluation of a cumulative course of study in developmental aid from the perspective of identity formation in nursing students: Transformation involving continuous personal events for acquiring social skills

Ryuko Tokunaga, Noriko Maeda, Kazuko Sonoda

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

**Key Words:** Cumulative lectures, nursing students, human development, independent behaviors, acquiring ways of thinking, interpersonal relationship skills, identity formation.

**Purpose:** The Developmental Aid Theory course of study aims for students to integrate previously learned material on human development and apply them to interactions with care receivers at a kindergarten, hospital, and nursing home during the development assistance practicum. It is a cumulative course of study comprised of a sequence of lectures, exercises, practice, and developmental classes. Was this the intended meaning and the educational goal is to utilize the practicum experiences in developmental learning. Student experiences include learning about human growth and development, independent behaviors for obtaining social skills, acquiring ways of thinking, and interpersonal relationship skills. The objective of this study is to evaluate whether the cumulative course of study from 2007 to 2011 met the educational goals. It further intends to offer direction for future instruction as course supervisors change with curriculum revisions, starting in 2012.

**Methods:** The present survey used a self-reporting questionnaire. Out of 254 first-year students of the nursing program at University A between 2007 and 2011, 222 provided consent and participated in the survey (collection rate 87.4%).

**Results and discussion:** First-year nursing students undergo a cumulative course sequence of lecture, exercise, practice and developmental classes. From this experience, students progress from not recognizing the need for identity formation to realizing that the purpose of the Developmental Aid Theory course is to unite people with nurses. The continuous exchange of realizations becomes similar to the development of the students themselves. Nursing students can acquire confidence through the course and exercises, and experience success in practice. This suggests that the course of study can serve as the start of a transformation, comprised of continuous personal events necessary for the development of social skills among nursing professionals. Was this the intended meaning? We tried to make it more specific and a stronger conclusion in the English.

---